

11月1日(水)の研究発表会にご参会いただき、ありがとうございました。分科会での質疑応答では、時間を十分に設けられず申し訳ありませんでした。当日、アンケートでいただいていたご質問に対する回答や当日の分科会での質疑応答の記録をまとめました。

アンケート用紙の質問に対する回答

Q、マイプラン学習は学期にどれくらい取り組んでいるのか。さらに、そのマイプラン学習の時数は何時間くらいか。また、マイプラン学習をしない単元はどうしているか。

- ・中目黒小学校は2期制だが、1年間を3期制として捉え、校内で統一して、学年ごとに学期に1回で年に3回のマイプラン学習に取り組んでいる。それ以上の取り組みを行っている学年もある。1教科で行うマイプラン学習もあれば、2教科同時進行で行うマイプラン学習も含まれる。学年の児童の実態に応じて実施している。
- ・授業時数は、教科書の配当時数をベースに考え、学年で相談し、年間指導計画の総時数とのバランスを捉えながら、指導の重点・育てたい資質・能力を明確にして、配当時数を増減させている。
- ・マイプラン学習を実施しない単元では、これまで同様の授業スタイルで実施している。何をマイプラン学習で実施し、何を従来通りの授業スタイルで実施するか、ねらいを明確にして実施している。
- ・マイプラン学習では、個別最適な学びを重点に置き、一斉学習では、児童同士の対話等を意図的に設定し、集団で学ぶ意義などを確認しながら、それぞれの形態でしか味わえない学習スタイルを通して、互いに補完し合えるような年間指導計画を立てている。「マイプラン学習のみ実施していれば児童は育つ」という考えではなく、それぞれの学習形態のメリット・デメリットを補完し合えるように学年団で計画的に実施している。

Q、マイプラン学習は理科・社会科の他にどんな実践・構想をしているか。特に外国語・体育科・音楽科などの構想について知りたい。

- ・低学年では生活科を中心に、高学年では、社会科を中心に実施している。2教科同時進行を組む際には、低学年では、生活科・国語科を、高学年では、社会科・理科を組み合わせで実施している。この他にも、校内では、算数科や保健の学習などでマイプラン学習を実施したことがある。
- ・児童に学びを委ねることで、安全確保や育てたい資質・能力の育成などが不十分になってしまうような教科・単元に関しては実施を控えていることもある。（体育科の運動の安全面や国語科の文学的文章など）また、児童同士の交流を中心に置くような教科は、マイプラン学習（一人学び）との親和性が低いものもある。ご質問にあったような外国語・体育科・音楽科での実践は、本校では令和5年度11月現在ない。

Q、マイプラン学習において、準備の段階で大変だったことや、計画や手引きを考える上で重要視したことなどがあれば知りたい。

- ・教材研究は大変であるが、40分授業午前5時間制の中で生み出された時間を有効活用して進めてきた。マイプラン学習の実践に学年差が生まれることをなくすための教員同士の対話を重視してきた。その一つの指針として、研究報告書の13ページに掲載している教員用のマニュアルシートやチェックシートを作成した。それをベースに、取り組みの足並みを揃えることや、児童に学びを委ねるという教員のマインドセットを重視してきた。
- ・個人研究ではなく、校内研究として、揃えるところと各学年の裁量に委ねるところを研究推進委員会で検討してきた。本校の強みは、全校で共通のマインドセットでこのマイプラン学習を進めていることが強みであると考えている。計画や手引きを考える上で重要視したことは、研究報告書の11・12ページをご参照いただきたい。児童の一人学びが実現できる情報提供を重要視している。

Q、マイプラン学習の実践は何から始めたのか知りたい。

- ・令和3年度には、どのような形でもいいので、最初はとにかく「実践してみる」というスタンスでスタートした。校内研究では、研究授業を公開し合うというスタイルではなく、実践したマイプラン学習の報告会という形で、各学年が「どのようなことを重視しているのか」「どのような資質・能力を育もうとしているのか」「その中で見られた児童の学びの姿や変容」などを語り合った。研究協議会というスタイルでは、実践学年からの伝達による一方通行になることが多いので、双方向のやり取りが可能となる対話中心の実践報告会とした。その各学年の実践の中で、「これは中目黒スタイルの自由進度学習である」という共通項を探し、そこを柱に本校のマイプラン学習の柱・外枠・目指す児童像などを確立してきた。令和4年度には、社会科・生活科を研究対象教科として定め、全校で取り組んだ。令和5年度には、発展的に2教科同時進行マイプラン学習に取り組んだ。
- ・現在の中目黒小学校で実践しているマイプラン学習の理論は、3年間の校内研究を通して培ってきた。校内からの実践報告と併せて、講師の先生からの指導・書籍からの情報収集・実践している学校からの情報収集・マイプラン学習の土台となる先行研究の理論など、校外からの情報収集を積極的に進めた。

Q、なぜ、2教科同時進行マイプラン学習が理科と社会科なのか。

- ・児童の学びの選択の幅を広げるという観点から、性質の異なる教科を組み合わせることが基本であると講師の先生から指導を受けた。調べ学習中心の社会科と、実際に実験を行いながら学び進める体験・活動中心の理科を組むことから、学びの質の違いにより、児童が飽きることなく学びに向かえるということで、この2教科を設定した。研究実践で参考にした書籍からも、社会科と理科の2教科を組み合わせている実践を多く読み取ることができた。

Q、2教科同時進行マイプラン学習のメリットは何か。（児童の立場・教師の立場）

- ・児童の立場からのメリットは、委ねられる時数が長くなることや、他者との比較による学習の遅れが顕在化しないことなどが挙げられる。デメリットは、本校では課題として出てきていないのが現状である。基本的に、児童は学びを委ねられることに対して肯定的な回答を示している。
- ・教師の立場からのメリットは、一斉指導では見ることができなかった児童一人一人が自己調整しながら学び進めている姿を見ることができたことである。また、その自己選択の根拠を明確に言える児童が多く、学びに見通しをもっていることを見取ることができた。デメリットは、児童の学びが広がるので、評価に繋がる見取りが難しくなった点である。また、2教科分の教材研究を同時期に並行して進めないといけないため、教材開発・教材準備・教材研究の時間が実践直前に増加した。

Q、下位層の児童のサポートをどうしているか。

- ・マイプラン学習の実践を紹介すると、必ず出てくる質問である。下位層の児童の学びをどのように保障するかであるが、一斉指導と比較すると、マイプラン学習の方が圧倒的に個に応じた指導に充てる時間が増える。
- ・マイプラン学習中、上位層の児童は、1人でもどんどん学び進めることができる。上位層の児童への働きかけは、取り組みの価値付けが中心となり、その反面、学びを進められていない児童がいたら、そこに時間をかけてサポートすることが可能となった。そもそも自由進度学習は、落ちこぼれではなく、浮遊する児童の学びをどのように保障するかという文脈で出てきているものである。その裏を返せば、見通しをもって学びを進められない子への対応を中心とする働きかけが、自ずと校内共通の教師の働きかけとして顕在化した。
- ・マイプラン学習は、1人では学び進めることが苦手な子を放置していると思われがちだが、本校の捉え方は真逆で、これまで一斉指導の中でできたつもり・分かったつもりになっていた児童を、ある意味、顕在化させ、何に躓いているのかを明確にして、そこに対して重点的にサポートできるようになったという捉え方である。一人一人の躓きに、最適な助言などを行っている。場合によっては、即時に助言せずに、その上手いかなかった事を共に振り返り、次にどのようにしたらよいかを、教師も共に考え、児童をサポートし、児童自らが見通しをもち、次時へ繋げることを手助けすることも実践の中で意図的に行っている。

Q、下位層の児童の変容を知りたい。（学力面・意欲面）

- ・児童の学力は、底上げを図れており、学級の平均点数が上昇傾向にある。また、躓きながらも、自分で学びを進めた達成感や、自己調整しながら学び進めた経験から、失敗を他人のせいにすることなく、学びを自分事と捉える姿が醸成され、全校児童を見ても、向上的な変容を見せている。
- ・3年間の研究を通して、単元によっては、学級の平均点の増減があり、安定しないことがあったことも事実である。また、意識調査も継続して、具体的な数値を、今後も蓄積していく必要がある。

Q、単元末の話し合いの問いの設定はどうしているか。

- ・研究報告書の11ページをご参照いただきたい。また、その単元で身に付けたい資質・能力を鑑みて、教師が単元末の活動を設定することもある。

Q、校内のICT化がどのように進んでいったのかを知りたい。

- ・一人一台の学習用情報端末が配当されたのは、全国と同時期である。通信環境も同時期に整備された。その中で、異動してきた教員による前任校での実践の紹介研修を実施したり、協働学習支援ツールやAIドリルの導入の際には、企業の方に依頼し研修会を実施したり、校内での各学級の実践を報告し合ったり、ICTサポートセンター・ヘルプデスク等へ問い合わせ対処方法を聞いて学んだり、週に数回来校する2名のGIGA支援員との連携を図ったりしながら、積極的にICTを授業場面や生活場面で活用していくことを大切にしている。

Q、働き方の回答について、良い回答になっていない理由は何か。

- ・本校は、生み出した時間の多くを、「自律した児童の育成」を目指すための「マイタイム」という学校裁量の時間に充てている。自学自習タイムとFSPJである。マイタイムの詳細は、研究報告書の15・16ページをご参照いただきたい。
- ・生み出した時間の活用においては、各校の特色が出る。「教員の働き方」の「勤務時間」という側面を重視している学校の回答は、よい結果となっている。生み出した時間を、教員に向けて活用するのか、児童に向けて活用するのかは、学校の実態に応じて各校の裁量に委ねられている。

Q、算数科の授業では、自力解決・まとめ・振り返りの時間確保をどうしているか。

- ・8分・27分・5分の1単位時間のスタンダードを意識しつつ、本時の内容により、教師が重点を置きたいところに時間を充てていく。時間を確保という意味では、ICTの効果的な活用方法が本校では、解決策として多く活用されている。（研究報告書10ページ参照）
- ・児童が見通しをもち学ぶことで、自ら学習のサイクルを回すことで、時間確保につながる実践もある。

Q、週案簿はどうしているか。

- ・本校独自開発のエクセルデータでの週案簿があり、40分授業午前5時間制の枠になっている。リーフレットの3ページをご参照いただきたい。また、週案簿をエクセルデータで作ると、児童に配布する「マイプラン」に連動する仕組みを構築し、作業効率を高め、時間短縮を図っている。区内学校にもデータを共有し、各校でアレンジを加えて活用している。

Q、児童の早い下校・帰宅に対して、保護者からの反対の声はあったか。

- ・本校では、20年以上前に40分授業午前5時間制を導入している。現在では、この仕組みが保護者・児童にとって当たり前となっており、特にここ数年でそのようなご意見を受けたことはない。また、早い下校に対しても、目黒区では、放課後子ども総合プランに基づき、学童保育クラブやランランひろばや子ども教室など、様々な事業と連携することで、児童の安全・安心な放課後は維持・持続できている。

Q、研究報告書6ページにある保護者アンケートの「放課後のゆとりというのは、主に教職員の方にとってのゆとりと捉える」という声に対して、どう思うか。

- このような保護者の声に対して、学校評価報告書に次のように回答し、全校に配布している。以下、報告書の内容である。「先生がゆとりをもって働けることは、子どもたちに良い教育・質の高い授業を提供することにつながります。午後のゆとりをもち、明日の授業の準備や成績処理などをできることは、子どもたちにとっても有益なことです。先生が病気などでお休みすることで一番困るのは子どもたちです。「働き方改革」を推進し、引き続き、先生がゆとりをもって働けるようにしたいと思います。」

Q、12ページの全国学力・学習状況調査の結果で否定的な意見も多いが、どう捉えるか。

- 今回の結果を改めて見てみると、「どちらかと言えば当てはまる」「どちらかと言えば当てはまらない」の中間層の回答が多い。「当てはまる」と回答している児童は、東京都・全国より10ポイント以上上回っており、児童に合った学習や授業を提供できていると言える。更なる肯定的な回答の増加を目指すには、まずは、このマイプラン学習は実践してきて、まだ3年目を迎えた研究であるということに一度立ち返ることが必要である。
- この回答をしている第6学年が第4学年の時からスタートした研究である。よって、これより下の学年が次年度以降、アンケートに回答する場合、マイプラン学習の実施時期は下学年化していき、低学年の頃からマイプラン学習を経験してきたことになる。小学校生活の初期からのマイプラン学習の導入になる。
- 「どちらかと言えば・・・」という中間層が、今後、肯定的になるか、否定的になるかで数値が変動してくると捉える。まだ、研究の道半ばである。この研究は、継続することで、児童の学びに対する当事者意識が醸成されてくると考える。継続していくことで更なる学びの定着を図っていく。

A分科会(40分授業デザイン)質疑応答

Q、標準授業時数1015時間は、どのようにクリアしているか。

- 127コマ足りない点については、教育特例校として40分を一単位時間としてカウントできるため、もともと、45675分(45分×1015時間)の授業を行っているところ、本校では、40600分(40分×1015時間)で授業を行っている。そこで生まれた5075分(40分授業で127コマ分)を、マイタイム、マイプラン学習の教材研究、チームOJTや教員マイタイムなどの学校裁量の時間として活用している。また、4月や夏休み明けは午前授業となっており、教員も児童も余裕をもって取り組むことができるため、働き方改革にもつながっている。

Q、特例校ではないと時数に関してはできないということか。

- 時数に関しては特例校ではないとできない。

Q、40分授業デザインの実践例として、2年生の生活科と国語科を組み合わせるという話があったが、専門性のある各教科の先生がいる中で、どのように学年会などで調整しているのか。もしくは、2教科を行うにあたってのフォーマットのようなものがあるのか。

- 昨年度、生活科と国語科の単元の合科指導を行った。今年度は、生活科と国語科の同じ単元の2教科同時進行マイプラン学習を校内研究で実践した。昨年度のものを参考にしながら、学年会の時間を活用して話し合いを進めた。同じ単元の2教科でも、組み方にはバリエーションがあり、それぞれの組み方のメリットを実感できる40分授業デザインとすることが大切である。2教科を行うフォーマットのようなものはない。

Q、2教科同時進行マイプラン学習など、学年として教え方をそろえることに抵抗感のある先生などがいえると思うが、どのように話し合っているのか。

- 学年単位でのマイプラン学習である。学年会で状況を伝え合うことを大切にしている。教職員の対話を中心に据えた研究である。

B分科会(マイプラン学習) 質疑応答

Q、4年生では、どのような単元内自由進度学習を行ってきたのか。また、単元内自由進度学習を通してどのような変容が見られるか。

- ・現在の4年生は、3年生から社会科の単元内自由進度学習を行ってきた。社会科では、今回を合わせると5回目の単元内自由進度学習になる。毎回、児童の取組や指導者の課題を整理しながら、ねらいを明確にしてブラッシュアップしてきた。
- ・児童の変容については、研究報告書の20ページ「ごみの処理と再利用」のマイプラン学習をご参照いただきたい。すべての項目で80%を超えている。
- ・本年5月と10月の4年生の児童への実態調査の結果の中で、「学習を進めていく中での自己調整」「協働的な学びの充実」「教科の見方・考え方を意識的に働かせる」ことが課題だと捉えた。そこで、今回のマイプラン学習では、学習調整や振り返りをフローチャート形式にしたり、見方・考え方をより意識できるような掲示をしたり、必要感のある協働的な学びの充実を図るために「マイタイミング交流」という活動方法を取り入れたりした。2教科同時進行マイプラン学習は初めてで、まだ学習の途中であるが、理科でも、社会科での学習経験を生かしながら学ぶ姿が見られ、積み重ねの大切さを感じている。

C分科会(マイタイムの時間) 質疑応答

Q、自学自習タイムを見学した。放課後に補習教室などを行っている学校も多くあるが、本日の自学自習タイムとはどのように違うのか。

- ・放課後の補習教室は、補充的な学習を行うものである。本校でも「中目寺子屋」という算数の補充教室を、放課後の時間を活用して定期的に行っている。
- ・本校のマイタイムの時間に行う自学自習タイムは、それとは異なり、自分で学ぶ教科を選んで、自分で計画をして学習に取り組むものである。補充的な学習だけではなく、もっと自分の得意を伸ばしたい教科などの学習を行ってもよい時間としている。
- ・自己調整力や自己実現力を育む観点から、自学自習タイムは単なる補習とは異なるものと考えている。

Q、自学自習タイムやFSPJの児童へのオリエンテーションの方法を教えてください。

- ・校内で統一の事前説明のプレゼン資料を作成し、児童へ提示・説明した。主な内容は、①安全面(安全が担保されない活動はさせない。)、②見通しをもつ大切さ、③児童が一人で計画を立てられるように具体的なイメージをもたせて取り組ませている。

Q、FSPJでは、子どもたちがやりたいことを全て実現しているのか。

- ・本校では、教員の配置できる人数によって、活動場所が決まる。児童と教員で合意形成を図りながら、児童がやりたいと思うことをできるだけ実現できるようにしている。教員だけでは実現できない実態があったので、今年度は、保護者ボランティアを募集し、できる限り、子どもたちの想いや願いを実現できるように工夫している。
- ・ゲーム作成も一律禁止するのではなく、学習用情報端末内のアプリなども可能な限り活用して、児童の想いや願いを叶えている。危険な物や学習から著しく逸れてしまうものは行っていない。

Q、リフレクションを行うときに、何か工夫していることはあるか。

- ・リフレクションは教員の負担が大きいという課題があった。毎日実施だったものを週に数回に限定している学年もある。実態に合わせて実施している。持続可能な取り組みとなるよう、教員同士で対話を重要視している。

Q、チームOJTの頻度はどれくらいか。

- ・月に1回で、60分程度で行っている。それをきっかけに、互いの授業を見に行ったり、放課後に話し合ったりと、月に1回のチームOJTが、日常的な関わりを生み出している側面もある。

Q、リフレクションの形は-googleクラスルームなどを活用しているのか。紙ベースなのか。

- ・リフレクションの形は学年によって違う。3・4年生は、B5ノートを活用し、5年生は、マイプランと一体にしたノートを活用し、6年生は、B5ノートを半分に切って活用している。学年の実態によって変えている。基本的には、紙ベースで実施している。

Q、チームOJTのチーム編成は通年で変わらないのか。毎年違うテーマなのか。

- ・チーム編成は年度当初にグループを作成している。半期で変えたいという声もあったが、年間を通して同じチームにした方がテーマについて深められるという声が多かった。教員のニーズに応じて来年度検討していく。テーマについては、チームで相談し設定しているので、毎年違うものである。

Q、OJTコーナーの内容やその報告は、ICTを使って共有しているのか。

- ・毎回の実施後は紙ベースで共有している。年度末に各グループから1年間の成果を発表する報告会を行う際には、データで共有している。